

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770064

研究課題名(和文) 戦後日本大衆文化における放送と音楽： 家庭 の表象を中心に

研究課題名(英文) Relationship between Broadcasting and Music in Post-War Japanese Popular Culture:
Focusing on the images of "Home"

研究代表者

輪島 裕介(Wajima, Yusuke)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50609500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦後大衆音楽文化において放送が果たした構成的な役割について検討した。主要な知見は以下のように要約できる。放送はその草創期以来、レコード産業及び映画産業とは一線を画した「家庭的」な文化を創出し普及しようとしてきた。その理念は、戦後初期には「ホームソング」という言葉で表現され、テレビ放送初期の音楽バラエティ番組が、その普及において非常に重要な役割を果たした。さらに、昭和40年代以降、文化産業の構造変化によって、放送が既存の娯楽産業に対して優位にたつ。その過程で、稚拙さや未熟さを意図的に強調することで「お茶の間」の共感を得ようとする「アイドル」という新たな形態が形成された。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to examine the constitutive role broadcasting played in formation of post-war Japanese popular culture. The main results are summarized as follows: Since its beginning, broadcasting has tried to create and disseminate homely and wholesome cultural expressions different from ones produced by the record and film industry. These homely and wholesome ideals were embodied in so-called "home songs", and broadly popularized by several musical variety programs in the early era of television. Moreover, after broadcasting came to play a definitive role in the general culture industry in the late 1960s, a new cultural form called "idol" emerged, which intentionally emphasized immature and amateurish characters to gain sympathy and support from domestic audiences watching television in their living rooms.

研究分野：ポピュラー音楽研究、大衆文化史、民族音楽学

キーワード：大衆音楽 放送 アイドル歌謡 対抗文化 ホームソング 民謡

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者はこれまで、主にレコード産業に注目して、日本の大衆音楽の歴史的展開について研究を進めてきた。日本の内外を問わず、既存の大衆音楽研究は、レコードとして制作・流通・消費される音楽をその第一義的な研究対象としてきた。また、これまで研究者が中心的な研究対象としてきた昭和初期から 30 年代までの時期については、大衆音楽レコード制作に関わる全てのスタッフが特定のレコード会社と専属契約を結ぶ強力な垂直統合システム（一般に専属制度と呼ばれる）を有していたため、大衆音楽におけるレコード産業の中心性は強固なものであり、そこに注目することは必然といえるものであった。

しかし、昭和 40 年代を通じて進行する、専属制度の崩壊を伴う音楽産業の構造変化は、既存のレコード産業内部の観点からだけでは十分に説明できず、外資系レコード会社の参入、音楽出版社による楽曲制作及び管理、対抗文化的若者音楽の参入、といった文脈の考察が不可欠であることが代表者のこれまでの研究から明らかになった。さらに、上記の文脈を包摂するものとして、放送（とりわけテレビ）は、大衆音楽にとどまらず、文化産業全体の構造変化の中心になったことがわかった。つまり、既存の販売網を持たない新興のレコード会社や、ロック/フォークのような自作自演的な若者音楽は、その認知を高める上でテレビやラジオを決定的に重要な媒体としていたし、単なる媒体にとどまらず、放送局が系列の音楽出版社を通じてレコード制作と権利ビジネスに能動的に関わることも常態化していった。これらの動きが相乗して、昭和 40 年代以降の大衆音楽環境が、それ以前とは明確に区別される形で、放送を中心に再編されることになる。この過程は、さらに巨視的に見れば、大衆娯楽全体の中心が映画からテレビへ移行したことと相関している。

かかる問題関心から、本研究では、大衆文化全般の中での音楽の位置を、放送との関連によって再検討することを目指した。そのなかでも特に、「家庭」の表象とその変容に着目することとした。その理由は、ラジオの放送開始時から、受け手が能動的に選ぶのではなく、受動的に送信された情報を受け取るありがたが強く意識され、「家庭」のメディアとして意識されていたことがあり、その外に位置づけられる劇場や映画館や飲食店での消費を中心とするレコード会社製の音楽歌謡とは敵対的な側面を強く持ってきたからである。そうした、健全さを志向する「家庭」のメディアとしての性格を持ってきた放送が、大衆文化の中心となってゆく過程で、それまで対立的な関係にあった諸要素をどのように包摂し、馴化し、あるいは排除するのか、を検討することは、昭和 40 年代以降の

大衆音楽の構造変化を、産業論やメディア/テクノロジー論に還元することなく、重層的な文化的構築物として理解する上で重要な観点であると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、戦後大衆音楽において放送が果たした役割について、家庭イメージの変遷という観点から読み解くことを目指す。

放送はその草創期以来、レコード産業及び映画産業とは一線を画し、一種の啓蒙主体として「健全」で「国民的」な文化を創出し普及しようとしてきた。その志向は、戦前の「国民歌謡」（昭和 11 年放送開始）を一種の雛形とし、戦後においては健全で明るい（なおかつ「洋風」の）家庭イメージを強調する「ホームソング」という語彙によって表現された。そこで、本研究全体の基礎として、昭和初期から 30 年代までの放送音楽の理念と実践について概観することが第一の目的となる。

第二の目的は、昭和 40 年代以降、既存のレコード・映画産業の制作方式の解体と、対抗文化的な潮流の影響下に新たな大衆娯楽の形態が形成される過程について、その産業的側面と文化的・思想的の双方から明らかにすることである。具体的には、既存のレコード産業の規範からすれば技術的に稚拙であり、また「若者」という狭い世代の対象に支えられていた GS（グループ・サウンズ）や、レコード会社専属の作詞家・作曲家による楽曲制作とは明確に一線を画する自作自演の姿勢を強調するフォーク・ソングが、前者は主にテレビ、後者は主にラジオ（とりわけ深夜ラジオ）を主要なチャンネルとして人気を獲得してゆく過程を明らかにする。

第三の目的は、そうしたいわば「対抗文化的」とも言いうる潮流が、昭和 40 年代後半に、広範な大衆的文化環境における新たな「主流」として確立する過程を検証することである。その際に特に注目するのは、戦後放送において、戦前・戦中の「上意下達メディア」としての性格を払拭するためにしばしば肯定的に強調された「素人っぽさ」という要素を、人為的に強調する新たな音楽形態としての「アイドル歌謡」の成立に関わる諸条件（一般参加オーディション番組、歌番組、レコード産業と映画産業との関係、芸能プロダクションや音楽出版社の関与など）について複合的に検討する。また、ある種の非専門性を重要な特徴とする「アイドル」は、専業の歌手であるにとどまらず、多くの場合、演技者としての側面を持っていたことに注目し、彼/彼女らがお茶の間に露出する重要な経路の一つである「ホームドラマ」についても検討する。テレビ放送初期の、アメリカ白人中産階級の生活を理想とした「豊かで明るい」イメージの拡散から転じて、特に 1970

年代以降は、きわめてドメスティックかつ自己反省的な性質を持つに至る過程を描き出す。さらに、「演技をする歌手」というあり方について、昭和 30 年代以前の大衆娯楽の中心にあった映画の場合と比較する。そのことによって、「盛り場」のメディアである映画から「家庭」のメディアであるテレビへの中大衆娯楽の中心の移行と関連付けながら、比喩的には「スターからアイドルへ」と要約しうる、パフォーマーの文化的位置づけの変容について検討する。

これらを通じて、健全性を志向する「家庭」のメディアである放送（とりわけテレビ）が、かつてはその対立物であった「盛り場」の娯楽を馴化しながら包摂してゆく過程について明らかにする。

3. 研究の方法

占領期から高度経済成長前期までの音楽における「家庭」イメージの理念と実践の内実を明らかにするために、雑誌や図書などの文献調査、放送台本など放送関連の一次資料の調査、関係者へのインタビューなど多様な方法を複合的に用いた研究を行った。具体的には以下の3点に集約できる。

(1) 昭和 30 年代までの放送と結びついた（また、レコード会社製の流行歌とは一線を画することを自覚的に目指した）大衆音楽形態である「ホームソング」に関わる基本的なデータを、音源（当時発売されたものと復刻されたものを含む）や当時の放送台本を調査し、その特徴を抽出した。特に、昭和 30 年代後半の代表的な音楽バラエティー番組である「夢であいましょう」（NHK）の放送台本を網羅的に調査し、また現存する全映像（13 回分にとどまる）の内容や使用された楽曲（とりわけ「今月の歌」として制作された番組オリジナル曲）を分析した。これらの基礎的な調査にもとづき、「上を向いて歩こう」や「こんにちは赤ちゃん」のような、「ホームソング的」な性質を強く持ちながら、レコードとしても大ヒットした楽曲が、いかなる背景から制作されたのかについて検討した。

その上で、戦前から 1960 年代に至る大衆音楽言説を調査し、左翼系の音楽運動、音楽教育、放送批評など、広範な文脈において、レコード会社製の「流行歌」と放送主導の「ホームソング」的楽曲群が、当時の同時代的な文化状況においていかに関連付けられていたかを調査した。

(2) 米軍キャンプ出自の芸能プロダクションを主たる担い手とする「若者」をターゲットとした、エレキ・ブーム、ロック（GS）、フォークといった、同時代のアングロ・サクソンの音楽的潮流が、テレビを通じて拡散する過程を、「対抗文化」とその商品化・メデ

ィア化という観点から検討した。具体的には、1965 年以降顕著になる、アマチュア参加のエレキ・ギターのコンテストを主題とするテレビ番組と、GS ブームを牽引した若者向けのテレビ音楽番組について、復刻された音源や、関係者による回想に基づく資料、当時の雑誌記事などを中心に調査した。

また、自覚的に「アングラ」を志向するフォーク運動において、深夜ラジオというメディアがどのような機能を果たしたのかについても、復刻音源、後年の研究書、当時の雑誌資料を用いて検討した。

理論においては、近年盛んになっている“global 1960s”に関する議論を精査し、世界諸地域における 60 年代後半の対抗的文化の批判的かつ相関的な読みなおしの文脈で、日本の事例を位置づけることを試みた。

(3) 昭和 40 年代後半以降、上述の対抗的な若者文化の意匠を部分的に用いながらもそれを「お茶の間」に向けたメディア環境に適合させた形態として、「アイドル歌謡」というジャンルが形成される過程について、文献資料の調査および録音音源の分析を通じて検討した。特に、産業的なアクターとして注目したのは、1968 年に設立されたレコード会社、CBS ソニーである。この外資系との合併会社の設立の産業的背景を確認するとともに、同社が、意識的に既存のレコード会社の専属制度を廃した制作方法を採用したこと、そして、そのこと自体を新奇なものとして、一種の販売戦略として強調したことに着目した。さらに、「アイドル」のキャラクター性を重要な構成要素とする新たなタイプの「ホームドラマ」が 70 年代以降積極的に制作されてゆくことに注目し、その分析を行った。主な分析対象としたのは、TBS テレビプロデューサー久世光彦が 70 年代に制作した「時間ですよ」「寺内貴太郎一家」「悪魔のようなあいつ」「ムー」「ムー一族」である。天地真理、浅田美代子、西城秀樹、沢田研二、郷ひろみといった当時の代表的「アイドル」と目される人々のイメージが、これらのドラマのなかでどのように提示されるのかについて、当時の雑誌資料や録音資料の分析を通じて考察した。

4. 研究成果

研究期間を通じて、雑誌論文 6 本、学会発表 9 回（うち英語発表 5 点）、図書 7 冊（うち単著 1 冊、英語論文集への寄稿 1 点）を成果物として発表した。件数が多いため、各々の成果物について概要を述べることはせず、中心的な成果について報告する。

本研究課題の核となる成果は、単著として刊行した『踊る昭和歌謡』（次項図書（4））である。1960 年代以降のテレビ音楽番組の分析に基づき、テレビにおける音楽の伝播にお

いてきわめて重要な視覚的要素となるダンスを軸に、近代日本大衆音楽史を再構成した。特に、1960年代初頭の「ドドンパ」については、永六輔をはじめとするテレビ初期の音楽放送の重要人物が深く関わっており、その流行においてもテレビCMという新しい表現形態が重要な役割を担っていたことを明らかにした。また、1970年代以降の「アイドル歌謡」にも注目し、単に「歌手」であるだけでなく「テレビであらゆることをする人」としての「アイドル」にとっての踊りの重要性について、歌番組にとどまらず、CM、ヴァリエティ番組、ドラマなども視野に入れて検討した。論文(4)(5)(6)、学会発表(6)(7)(8)(9)は、同書の議論に結実し、またそこから直接派生した問題を扱ったものである。特に学会発表(6)(7)(8)は、いずれも国際学会及びシンポジウムでのものであり、十分な国際的な発信が行うことができたと考えている。

上記の研究成果を補完する研究成果として、戦後初期のラジオ放送と大衆音楽の関連を論じた論文(1)、学会発表(2)がある。論文(1)では、洋風かつ家庭的な放送主導の大衆歌謡の系譜を、占領期という文脈に位置づけたものであり、発表(2)は、「民謡」という鍵概念にもとづき、昭和30年代の「健全」志向の音楽実践を特徴づけた。いずれも、既存のレコード歌謡中心の大衆文化史観では見落とされがちな大衆音楽のあり方について新たな光を投げかけるものである。

また、近代日本大衆音楽史のより大きな見取り図に関する研究成果(これは2016年度に採択された挑戦的萌芽研究課題に密接に関わっている)である学会発表(1)(3)(4)(5)、図書(2)(5)(6)(7)にも、本研究を通して得られたメディア史的な知見が十分に反映されている。たとえば、図書(7)では、「歌う映画スター」として美空ひばりのスター・イメージを分析したが、そこでは70年代以降のテレビにおける「歌い演じるアイドル」との対比を行っている。

以上のことから、全体として十分な研究成果が挙げられたと考えているが、1960年代後半のエレキ/GS/フォークについて、また、70年代アイドルが出演するテレビドラマについてなど、本研究課題での研究の蓄積にもとづき個別に展開しうる主題はまだ残している。これらについても近日中に積極的に発表していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

(1) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(6)『モシモシアノネ』と『カム・カム・エブリ

ボディ』から始まる戦後」、『アルテス』2013年12月号、122-129頁、アルテスパブリッシング、査読なし

(2) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(7)脱植民地化の中で標的にされたカタコト歌謡『トンコ節』と『ゴメンナサイ』」、『アルテス』2014年3月号、113-126頁、アルテスパブリッシング、査読なし

(3) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(8)銀座でロックするジャズ小僧-ロカビリー・ブームに見るカタコト歌謡」、『アルテス』2014年7月号、15-28頁、アルテスパブリッシング、査読なし

(4) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(9)ニューリズムとホニオリン」、『アルテス』2014年10月号、37-48頁、アルテスパブリッシング、査読なし

(5) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(10)トランスナショナル・ドドンパ」、『アルテス』2015年1月号、89-104頁、アルテスパブリッシング、査読なし

(6) 輪島 裕介 「カタコト歌謡の近代(11)トランスナショナル・ドドンパ(2)」、『アルテス』2015年2月号、112-125頁、アルテスパブリッシング、査読なし

〔学会発表〕(計 9 件)

(1) 輪島 裕介 「戦後日本大衆音楽におけるエキゾティシズムと自己エキゾティシズム」、日本ポピュラー音楽学会 第25回全国大会シンポジウム「エキゾティシズムとその向こうにあるもの」ポピュラー音楽の(非)嫡出子たち、関西学院大学、2013年12月7日、

(2) WAJIMA, Yusuke, “Min’yo in the ‘Showa 30s’ Period in Japan: The Left-wing, Bars and the Music Industry”, 国際シンポジウム “Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage”, Goldsmith, London University, 2014年2月20日

(3) WAJIMA, Yusuke, “Orientalism and Self-Orientalism in Postwar Japanese Popular Music”, Faculty of Philosophy, Ljubljana University (招待講演), 2014年4月9日、11日

(4) WAJIMA, Yusuke, “Japanese Popular Music after 1970s”, KAKEHASHI PROJECT 学生クリエイター交流、国際交流基金、2014年6月13日

(5) 輪島 裕介「音楽における痕跡 楽譜と録音の諸問題」、諸学書道史学会大会シンポジウム「伝承と生成の形 書学書道史と芸術諸学」、花園大学、2014年9月13日

(6) WAJIMA, Yusuke, “Dodonpa, a Latin Rhythm Made in Japan?: Transatlantic and Transpacific Connections in Popular Music”, Music Research Series Paper Presentation, “Nationalism, Folklorism, and Exoticism in Modern Japan”, Department of Music, Goldsmiths, University of London、2015年2月17日

(7) WAJIMA, Yusuke, “In Search of the Japanese Idol: From Nationwide Attraction to the Local/Transnational Subculture”, 18th Biennial IASPM(International Association for the Study of Popular Music) Conference, “Back to the Future: Popular Music and Time”, Universidade Estadual de Campinas, Unicamp, São Paulo, Brazil, 2015年7月1日

(8) 輪島 裕介「越境するダンス・リズム オフビート・チャチャノドンパから「恋をするなら」/「墓仔埔也敢去」へ」(中国語通訳付)、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、愛知大学国際問題研究所、愛知大学現代中国学会、東呉大学人文社会学院共催国際シンポジウム「台湾流行歌謡—日本・中国との文化的交錯」、名古屋大学、2015年7月18日

(9) 輪島 裕介「『踊る昭和歌謡』を分析する—ドドンパを中心に」(招待講演)、日本リズム協会第52回例会、2016年3月13日

〔図書〕(計 7 件)

(1) WAJIMA, Yusuke, “The Birth of Enka”, in Toru Mitsui (ed.), *Made in Japan: Studies in Popular Music*, pp.71-83 (全270頁), Routledge, 2014年7月

(2) 輪島 裕介「『カタコト歌謡』から近代日本大衆音楽史を再考する」、東谷護(編著)『ポピュラー音楽から問う 日本文化再考』、47-80頁(全293頁)、せりか書房、2014年10月

(3) 輪島 裕介「演歌は日本人の心の故郷か?」、JASRAC 創立75周年記念事業実行委員会『うたのチカラ JASRAC リアルアカウントと日本の音楽の未来』、94-104頁(全416頁)、集英社、2014年11月

(4) 輪島 裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』、全272頁、NHK出版、2015年2月

(5) 輪島 裕介「音楽史の可能性」、佐藤卓己(編)『歴史のゆらぎと再編(岩波講座 現代 第5巻)』、269-282頁(全288頁)、岩波書店、2015年11月

(6) 輪島 裕介(項目執筆)「演歌」(44-45頁)「アメリカ軍キャンプ・将校クラブの音楽」(53-55頁)「ロカビリー旋風」(165-167頁)「エレキブーム」(193-195頁)「ビートルズ」(197-199頁)「ロック」(241-243頁)「ライブハウス」(260-261頁)「J-POP」(269-271頁)戸ノ下達也(編)『戦後の音楽文化』、全298頁、青弓社、2016年1月

(7) 輪島 裕介「美空ひばり 生きられた神話」、杉田敦(編)『終焉する昭和 1980年代(ひとびとの精神史 第7巻)』、281-306頁(全336頁)、2016年2月

〔産業財産権〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

輪島 裕介 (WAJIMA YUSUKE) 大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50609500